

第49回 (R4. 1)

初雪暮情

いささか拍子抜けの朝を迎えた。10cm程の積雪予報に反して、今年の初雪はわずかに屋根を白く飾ったに過ぎなかった。

ところで災害をもたらす雪を「白魔」と呼ぶ。北国ほどではないが松江でも交通機関の乱れなど、積雪は日常生活に大きな影響を与える。いつの間にか私たちは積雪を、面倒で厄介で怖いものと思うようになってしまった。

しかしながら、思い起こせば幼い頃、白いベールに覆われた光景にどんなにワクワクしたことが。子犬のように雪原を駆け巡り、仰向けざまに純白の大地に倒れこみ、キャッキヤと笑い転げたこともあった。水溜りの氷を踏み砕き、そのかけらを頬にあて「ツメテ〜」と叫んだことも懐かしく思い出す。

またある時は舞い降りる牡丹雪を受け止めようと、鉛色の空に向かって大きく口を開けたことも。雪が口を外れて

睫毛に付着すると慌てて目を閉じるのだが、花びらのような雪片は瞼の上でゆっくり融けていくのだった。積雪は大いなる興奮と感動を子ども達にもたらした。

十代後半になって多少色気づいてきたころ、アダモの「雪は降る」に心を揺さぶられた。「雪は降る あなたは来ない」という歌詞で始まるこの歌は、雪の降る夜に恋人を待つ切なさや歌ったものだが、ここで歌われる雪は逢瀬を邪魔する憎い雪というより、恋の切なさを演出するBGMのように思えたものだ。

この冬、牡丹雪が舞う日には「雪は降る」を口ずさむもよし、童心に帰って空に向かって大きく口を開け、白い花びらと戯れるのも一興かと思えます。冷たいはずの牡丹雪が、心を温めてくれるかもしれませんね。